

メディアと子ども 2

2004.04.29

以前のこのコーナーで小児科の学会からテレビを2歳までの子どもには見せないようにという提言を紹介しました。全国的には、「子育てをしたことがない小児科医の無謀な提言」などと批判が出ているようですが、いま子どもに起こっていることを考えると、何かしら急速に子育て環境が変化しているのは事実のようです。今日、新聞を読んでいたら、小1プロブレムという言葉が出ていました。今の小学一年生は小さいときに我慢をしたり、静かにする場面で静かに待ったりすることができないので、幼稚園の先生や保育園の先生が小学校に出向いて学校の先生を支援する地域が増えたということでした。子どもに起こっている変化は、家庭や社会、特に家庭の中での育児環境の悪化がその一端と考えている方が少なくないです。パチンコなどの遊技場や居酒屋、カラオケボックスで育児室を設けるところが増えています。子連れでそれらのところに入出入りする方が増えているからというのが理由のようですが、親のほうはというと「車にほっておいていいのか」ともっともらしい意見をまくしたてて育児室がないことを非難するというから、必要なのは親の再教育なのでしょう。

昔も今も、生まれてきた子どもは何も変わっていません。ごく一般的に育った子どもの基礎的な部分は私が子どものころとまったくと言っていいほどかわっていないと思います。子どもはその持っている本質の上に、家族や社会からの刺激を受けて、人とかかわること、社会で必要なルールを学んで人格が作られていきます。

子どもには子どもに必要な環境というのがあります。私らしい育児をすることも大切ですが、子どもらしい生活を犠牲にした私らしさなら、それは消極的なネグレクト(育児放棄)になると私は思います。テレビをみせるなっていうのはセンセーショナルで受け入れがたい意見かもしれません。子育ての実際を知らない小児科医の無謀な意見ではなく、この言葉をきっかけに、これから育つ子どもを守るために家庭の中で育児のことをもう一度考えていただけたらと思います。